



日语教育与日本学研究

——大学日语教育研究国际研讨会论文集（2012）

主編／刘晓芳

副主編／毛文伟

徐曙



华东理工大学出版社



日语教育与日本学研究

大学日语教育研究国际研讨会论文集(2012)

主编 / 刘晓芳

副主编 / 毛文伟

徐曙



华东理工大学出版社

上海

图书在版编目(CIP)数据

日语教育与日本学研究——大学日语教育研究国际研讨会论文集(2012)/刘晓芳主编.
—上海:华东理工大学出版社,2013.2

ISBN 978-7-5628-3462-5

I. 日... II. 刘... III. 日语-教学研究-高等学校-文集 IV. ①H369.3-53

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2013)第 016696 号

日语教育与日本学研究

——大学日语教育研究国际研讨会论文集(2012)

主 编 刘晓芳

副主编 毛文伟 徐 曙

责任编辑 / 孙 颖

责任校对 / 陈孟昀

封面设计 / 戚亮轩

出版发行 / 华东理工大学出版社有限公司

社 址:上海市梅陇路 130 号,200237

电 话:(021)64250306(营销部)

(021)64252001(编辑室)

传 真:(021)64252707

网 址:press.ecust.edu.cn

印 刷 / 常熟新骅印刷有限公司

开 本 / 787mm×1092mm 1/16

印 张 / 21.25

字 数 / 591 千字

版 次 / 2013 年 2 月第 1 版

印 次 / 2013 年 2 月第 1 次

书 号 / ISBN 978-7-5628-3462-5

定 价 / 150.00 元

联系我们:电子邮箱 press@ecust.edu.cn

官方微博 e.weibo.com/ecustpress

淘 宝 网 <http://shop61951206.taobao.com>



前 言

2012年6月9日上午,由中国日语教学研究会上海分会举办的“2012年大学日语教育与日本学研究国际研讨会”在同济大学外国语学院新楼大厅隆重召开。教育部外语指导委员会日语分会主任、上海外国语大学教授谭晶华,中国日语教学研究会会长、北京日本学研究中心主任徐一平等分别为大会致开幕词。本次会议特别邀请了徐一平教授、北京大学外国语学院彭广陆教授、北京日本学研究中心副主任曹大峰教授、日本上智大学名誉教授加藤幸次等为大会作了精彩的基调演讲。

本次研讨会是在中国日语教学研究会天津换届选举会议之后国内成功举办的首个大型国际会议,也是中国日语教学研究会上海分会自去年5月22日成立以来独立举办的首个大型国际会议。本次国际研讨会不仅得到了我国教育部的正式批准,而且一如既往地获得了新世界教育集团、卡士欧上海贸易有限公司、华东理工大学出版社、J-TEST中国事务局的鼎力支持,也得到了高等教育出版社、北京大学出版社和海文出版社的大力协助。在6月8日至10日三天的会议期间,共有来自全国各地和日本、韩国的专家学者将近150人莅临会场。在9日下午至10日上午的大会议程中本次研讨会在内容和形式上都做了有益的改变和大胆的尝试,不仅推出了日本语言教育、文学文化、社会和翻译等11个分会场,还由秦正春教授牵头举办了关于“大学日语教育的现状与课题”的调查发表会,由武内清教授等主持了“将来日语教育所必须关注的问题”的专题讨论会,新颖、活泼的会议形式得到了与会者的一致好评。本次研讨会继续设立了研究生专场,并由中日韩的著名学者徐一平教授、小泉政利教授(日)和金泰虎教授(韩)等担任点评嘉宾,取得了良好的效果。在10日的闭幕式上,皮细庚教授、佐藤势纪子教授和小泉政利教授的精彩发言为本次研讨会画上了圆满的句号。

本论文集是各位参会者结合研讨会上所收集到的意见进行认真修改之后,编委会又请专家们对投稿论文进行了认真的审阅和遴选之后,交由华东理工大学出版社汇编而成的。作为本次研讨会的具体成果体现,我们希望能继续得到各位方家的指正,也希望以此凝聚更多日语教育与日本学研究的中坚力量,为我国日语界的繁荣尽一份绵薄之力。

《日语教育与日本学研究——大学日语教育研究国际研讨会论文集(2012)》编委会
中国日语教学研究会上海分会
2012年12月21日

目 录

日本語教育

大学における日本語教育の現状と課題

- 学生の意識を中心に…………… 秦政春 张丽梅 窦心浩 陈毅立 张 建(1)
- 経済産業省アジア人財資金構想「東北大学 ASIST」におけるe-learning 教材の開発……………
…………… 虫明美喜 金文浩 押谷祐子 鈴木衣今子(7)

教材としての『枕草子』

- 中国の大学修士課程日本言語文化専攻一年生・日本古典文学講読についての試み
…………… 李晓梅(11)

初級会話教材における日中同形語についての一考察

- 「新総合日本語会話日本語」を中心に…………… 闻 艺 周桂香(16)

第二言語における日本語受動構文の習得過程

- OPI 発話資料を基に…………… 張 蘇(21)

基于语料库的日语新闻听力教材编写策略…………… 白晓光(26)

听解语篇结构解析

- 基于日本語能力测试一级语料…………… 张 颖(30)

日本語聴解の制約要因及び指導対策…………… 李晓霞(39)

建构主义学习理论视角下的日语教学研究综述

- 以中国国内的日语教学研究为中心…………… 王玉明 闻 艺(43)

日本語「テイル」形の習得に関する一考察

- 学習者の語彙能力の推移という視点から……………
…………… 孫 猛 玉岡賀津雄 宮岡弥生 小泉政利(47)

试论外来词与汉语词汇的规范化…………… 邱根成(53)

日本語教育と認知言語学…………… 黄春玉(58)

オノマトペの習得について

- 電子科技大学日本語科の学生を対象に…………… 譚 冰 孟 亮(62)

日语中谦语「お(ご)～する」、「お(ご)～いたす」、「お(ご)～申す」的使用…………… 沈 悦(68)

探讨日语 MTI 建设过程中的若干问题

- 以东华大学外语学院为例…………… 钱晓波(72)

中国の大学日本語科における音声指導の現状と課題

- 中国人日本語教師への質問調査により…………… 乔 颖(79)

中国人日本語学習者の誘いに対する断り談話

- 関係維持に着目して…………… 周依丹 田崎敦子(84)

日语教学中的终助词“よ”“ね”“よね”的应用…………… 罗春梅(89)

从学生的需求角度探讨大学日语教育	隋吉原(98)
论在华日资企业的需求的变化对日语教育的负面影响	周 军(102)
日语课活动模式的探讨及研究	张 婷(105)

日本語学

二言語併用者の音声知覚

——CVCV型・VCV型無意味語の知覚を中心に	任 星(108)
類型論から見る中日両言語の多義構造	盛文忠(113)
(サ)セル構文の結果含意について	
——日中対照と使役連続体の視点から	杨久成(120)
“というか”的語用再考	石金花(125)
“走る”的多维语义扩展机制	
——基于语料库的用例研究	谢东华(130)
「シヨウト思ウ」と「シタイト思ウ」	
——コミュニケーション機能からの考察	孫樹喬(135)
オノマトペの意味・用法に見る共感覚比喻について	
——「さっぱり」を例に	唐晓煜 孟庆荣 王玉明 闻 艺(139)
ヲ格の「非既存の対象」について	杨 敬(143)
表層格と深層格の一対多の認識メカニズムに関する考察	须 军(147)
動名詞述語文研究	
——名詞と動詞の関係を中心に	唐千友(150)
日本語の敬語とその言語機能について	陶友公(156)
日本語の文における格の交替現象について	金鏡玉(161)
文の概念構造に関する研究の共通点と相違点	
——日本語条件文をめぐる	徐秀姿(165)
依頼行為における待遇の機能について	时晓阳(169)

日本文学

『源氏物語』明石君の物語における唐代传奇『鶯鶯伝』の引用をめぐる	日向一雅(174)
日本の和歌と俳句に見られる隠喩的表現について	
——中国の近体詩との対照を兼ねて	毛峰林(179)
物語とジェンダー	
——「女の身」と「女の心」をめぐる一考察	佐藤勢紀子(183)
「王昭君」と平安物語	李宇玲(188)
石川達三の戦争文学をめぐる	
——その文学の投機性を中心に	李先瑞(192)
平成元年から平成10年までの日本女性文学の一考察	李光华(197)
大江健三郎小説の反讽叙事	兰立亮(202)
太宰治「竹青」の悪妻像に関する一考察	
——聊齋志異「竹青」と比較して	沈彩虹(208)

遊歴の女性漢詩人一原采蘋の生涯	小谷喜久江(213)
《不如归》之文言文汉译研究	杨文瑜(217)
豊子愷訳『源氏物語』の引歌について ——豊子愷訳『伊勢物語』と比較して	徐迎春(222)
井上靖西域世界中の美	钟 响(227)
自然の鎮魂曲 ——深沢七郎の「笛吹川」のテキスト分析	高 艶(230)
道浦母都子論 ——揺れる私 二律背反の「われ」を詠い生きる	朱卫红(234)
岛崎藤村在中国的译介和研究	刘晓芳(239)

日本文化

「日本茶道の形成—立花実山『南方録』からみた千利休茶道」についての考察	山根政子(246)
日中文化交流に関しての一考察 ——松本亀次郎の生き方	高橋良江(250)
武家社会における端午の節句	张 燕(254)
少子老龄化背景下日本老年人生活现状和社会参与特征探析	马利中(259)
「遠慮・察し」式的交际方式 ——以「甘え」的心理分析为中心	杜 勤(266)
佛教与日本人的战争责任认识 ——以净土真宗为中心	崔 岚(272)
“いき”——基于性别关系解读的市民美学	魏丽华(277)

院生論文

名詞述語文の「だ」と「だろう」の対立について	阳贝壳(281)
中国語“一概”と日本語「一概」構文上の異同—肯定・否定を中心に	石立珣(288)
並列助詞について	包自珍 陶友公(294)
会話中心の推理のプロセス ——『途上』を中心に	顾世渊(299)
日本語の自他動詞の使用と日本文化との関連について	陈咪咪(308)
日本近代文学における『ハムレット』の受容 ——太宰治『新ハムレット』を中心にして	何晓静(311)
幻想的な異界 ——鏡花作品中の山を中心に	刘 晔(315)
日本近代文学における変身物語 ——「山月記」と「狼災記」をめぐって	柏 青(320)
額田王身世小考	赵思嘉(326)

大学における日本語教育の現状と課題 ——学生の意識を中心に

同济大学・上海海洋大学 秦政春 上海海洋大学 张丽梅
上海外国语大学 窦心浩 同济大学 陈毅立 上海外国语大学 张 建

1 はじめに

最近の学生たちは勉強しない。授業をよくさぼる。宿題を出してもしてこない。やる気がない。先生たちのこんな声をよく耳にする。いっぽう、学生たちの声である。授業がおもしろくない。暗記、暗記で、いやになる。試験の連続で忙しい。自分の時間がない。大学はもっと自由だと思っていたのに、ぜんぜん違う。

第三者的な意見で恐縮だが、先生たちから学生に対する、逆に学生たちから先生に対する不満をよく聞く。中国の大学の、とくに日本語学科の先生たちは、とても熱心である(と、筆者はいつも感じている)。そして、日本語学科の学生たちも、一部の例外を別にすれば、とても真面目に勉強に取り組んでいる(ように、筆者にはみえる)。

こんな状況をみていて、先生と学生たちとの間にミスマッチが生じているのではないかと感じるようになった。つまり、お互いの意思や期待や希望といったものが、十分に伝わっていないのではないか。だから、相手に対して不満が出る。しかし、それでも授業だけは進行していく。いうまでもなく、こんな状態は不自然であり、両者にとってとても苦しい。

こうした現実が生じている背景に、いったいどんな事情があるのか。これが、今回の調査研究を実施することにした直接的な問題意識である。

2 調査の概要

さきほどの問題意識に基づいて、今年(2012)年4～5月に上海市内の6校の大学(日本語学科の学生、1～4年生)を対象にして質問紙調査を行なった。有効サンプル数は、A 大学405、B 大学123、C 大学335、D 大学122、E 大学79、F 大学が101で、計1165を数えている。対象にした6校のうち、3校がいわゆる「重点大学」、残りの3校は「一般大学」である。学年別の内訳は、1年生から順に359、313、307、186である。

質問紙の内容は、日本語教育に関するものだけではなく、学生生活全般、そして学歴意識や人生観、将来展望など多岐におよんでいる。ただ、本小論では、日本語教育に限定して、教員に対する意識、授業に対する考え方、日本語教育に対する満足度や要求、勉強の状況、生活時間、などといったものを取り上げて検討を進めていく。

なお、本稿の執筆分担については、1～4、および10を秦政春、5～8は張麗梅、そして9を竇心浩が担当した。

3 日本語に対する学生たちの認識

これに関する学生たちの平均的な状況をすこし紹介しておきたい。日本語が好きという割合は全体の7割程度を占めている。そして、日本語は難しいという意見が、これまた7割ほどである。そうした学生たちの多くは、「とても努力をしている」というわけではないが、まあまあ努力しているといった様子である。

全体的にみるかぎり、大多数の学生たちは日本語に「適応」しているように感じられる。しかし、データを注意深く読んでいくと、日本語が好きという割合が、学年進行にともなって確実に減少していく。つまり、日本語が嫌いという割合が増加する。日本語が嫌いという割合を示しておくと、1年生が20.9%、2年生27.1%、そして3年生になると33.6%になる。参考までに、4年生の割合は25.3%である。

4年生の割合はともかく、1年生から順に学年進行にともなって「嫌い」という割合が増えていく。そして、その割合は、3年生になると全体の3割を超えるほどである。また、日本語の学習に対する学生たちの努力に関しても若干の問題がある。「努力していない」という割合を示しておくと、1年生から順に20.3%、19.2%、25.0%、そして4年生は37.1%である。

ここでも、4年生についてはともかく、どの学年をみても、努力を放棄した2割程度の学生たちの姿がある。そして、データを詳しくみると、1年生の後半時期ですでに2割程度の割合に達している。しかも、どの学年においても、この割合があまり変わることなく推移している。したがって、どの学年でも日本語学習に「問題をかかえている」学生が、2割程度を占めていることになる。これに関して、とくに大きな問題は、1年生段階ですでにこうした学生が2割を超えているという事実である。

4 日本語学習に関する学生たちの問題状況

学生たちの問題は、それだけではない。自分に自信があるという割合に関して、ここでも学年が上がるにつれて、その数値が明らかに減少していく。自分に「自信がない」という割合を紹介しておくと、まず1年生27.3%である。ところが、2年生になると40.3%、3年生でも40.7%、参考までに4年生は17.2%になる。

おそらく、4年生は就職が決まるなどの状況によって、自信が回復したのかもしれない。しかし、2年生、3年生の「自信がない」という割合は、かなり高いといわざるをえない。たしかに、この原因については、いまのところあまり明かかではない。しかし、1年生から2年生にかけて、急激に割合が増加している事実を考えると、大学における教育、とくに日本語教育になんらかの原因があることは否定できない。

このことについては、つぎの結果をみればよくわかる。日本語を専門にしたのは、正しい選択だったのか、それともまちがった選択だったのかという問題である。「まちがった選択」だったと考えている割合を示しておくと、つぎのようになる。1年生の場合は17.5%にすぎない。ところが、2年生になると、この割合が32.2%に増加する。さらに、3年生では43.6%に達している。4年生になると、さきほどの自信と同じく、やや回復傾向をみせており32.8%である。

ごく常識的に考えて、日本語専門が「まちがった選択」だったと考えている学生が、とくに3年生において全体の4割を超えているという事実は、かなり深刻である。「まちがった選択」だったと考えること自体、ある意味で自己否定にも等しい。しかも、この割合は、1年生段階

から学年進行にともなって順に増加傾向を示している。

この結果をみれば、日本語に対する学生たちの「不適応感」だけではなく、自信喪失という深刻な問題状況も、大学における教育が原因と判断していっこうに差し支えない。

5 先生の学習監督とそれに対する学生の対応

精読授業を担当する先生を中心に、学生の感じ方を聞いた結果、「とても厳しい」、または「比較的に厳しい」と感じている学生は全体の76.3%という高い割合を占めている。

では、先生の厳しい要求に対して、学生たちはどう対応しているのか。「先生が厳しく要求するか」と「あなたが努力しているか」のクロス表作ってみると、先生の要求に応じて、学生たちが努力していると分かる。また、「先生が厳しく要求するか」と「予習するか」とのクロス表でも先生の要求具合によって、学生が課前予習していると示されている。つまり、先生が厳しいほど、努力する学生と予習する学生の割合が高くなる。

「先生の要求」と「口頭宿題に対する態度」、「修正後の書面宿題をまじめにチェックするかどうか」などの質問項目とクロス表を作ってみても、同じ傾向を目に留める。つまり、先生が厳しく要求するほど、学生が真面目になるという傾向である。

一見して、学生が先生の要求に応じて真面目に勉強してくれている。先生が厳しく要求する価値はそこにありそうである、とめでたく思われるかも知れないが、しかし、こういう現象を裏返して考えてみよう。もし先生が厳しくしなければ、学生が行動しないという意味合いも含まれているのではないかと考えておる。それは正に学生の受け身姿勢ということである。

6 学習意欲欠如と積極性喪失

そういう受け身姿勢の裏付けとして、別の視点で(「先生は厳しいか」と「予習するか」)をもう一度見てみよう。

「先生がやや甘い」と思う学生にはあまり予習しない割合が59%、「非常にあまい」と思う学生にはあまり予習しない割合が65.5%にまで上り、そして、全体の45.9%(五割近く)の学生が真面目に予習していないと分かった。予習することは日本語勉強する中で大変肝心な一環であるが、普通の宿題と違って、いちいちチェックすることも、評価することも難しいので、先生にはとても監督しにくいところである。ほとんど、学生本人の学習意欲と積極性次第なので、学生の積極性と学習意欲を反映する大きな指標ともなると思う。

また、「先生は厳しいか」と「授業の時、発言するチャンスが欲しいか」とのクロス表からは、先程、ご覧の一連のクロス表に現れた傾向が見えない。それは発言する意欲というものは内発的で、学生の本心の現れであり、先生の要求に応じ難いためだと言えよう。

7 自己診断からみた意欲欠如

こういう学生の「受け身姿勢」は学生の自己診断という視点でも表されている。

「なぜ日本語力が上がらないか」という問題に対して、学生たちは次のように答えている。

「自分の態度が真面目ではないため」は76.6%、「課外練習機会が少ないため」は64.4%、「雰囲気がよくないため」38.3%、「サークル活動が多すぎるため」33.3%である。

自己診断では「自分の態度が真面目ではなかったためだ」と思う学生の比率はトップになっ

ている。

先生の要求に応じて努力していると思っていながらも、実際の態度が良くないと学生たちは白状している。言い換えれば、それは本心から勉強に取り込んでいるわけではないということ、いわゆる「表と裏」であろう。

日本語が上達しない原因は課外では日本語を練習する機会が少ないためだと思える学生は二番目に多い。これも学生の意欲欠如を裏付けている。

練習機会が欲しいと考えながら、学年の順に授業中に発言する意欲が喪失しつつある。三年生になると38.8%の学生が発言したくないと自覚しているという現状である。三年後半の学生は日本語レベルから見れば、かなり上達して、たくさん話せる反面、もう話したくなくなる。一年から三年へと、学生の発言する意欲喪失が目に見えて明確化する。

8 先生の授業監督実態

こういう学生たちに対する先生の指導力点はどうだろうか。

学習態度重視度、自学力重視度、学習方法の指導、積極性の引き出しなど、4つの面を学生たちの受け止め具合を聞いてみた。結果は次の通りである

	とても重視する		あまり重視しない+全然重視しない
学習態度重視度	43.9%	—————	7.9%
自学力重視度	32.2%	—————	10.5%
学習方法重視度	28.0%	—————	18.0%
積極性の引き出し	25.1%	—————	16.8%

これらのデータからは、学生の学習態度をもっとも重視されているのに対して、学習方法の指導と学生の学習積極性の引き出しは、まだ十分に重視されていないと分かる。

学生側の学習実態と先生側の日本語教学実態を合わせてみれば、学生の受け身姿勢と先生の指導力点などの問題点が浮き彫りになると言えよう。

要するに真面目そうに対応してくれる受け身姿勢の学生たちに対して、どういう授業管理を施したらいいか、それから、指導力点をどこに置くべきかということを考えなければならない時期が迫ってきていると思う。

9 日本語専攻大学生の学習活動と意識

大学教育の質保障は高等教育の直面する重要な課題の一つである。大学生の学業達成度は質を測る主な指標とされているが、学生の日常的な学習生活によって決められている。本節では、学生の学習活動や学習意識を調べ、大学教育の質保障に存在する問題を探ってみたい。

9.1 大学生の学習生活

大学での授業科目を専門必修科目、専門選択科目、教養必修科目、教養選択科目という四種類に分けると、学生の出席率は順番に下がっている。84.8%の学生は専門必修科目の授業にすべて出席しているのに対し、教養選択科目の場合はわずか48.6%に過ぎない。さらに、大学教員との交流も担当する授業の性格との強い相関関係を示している。授業時間を除いて、62.9%の学生は本専攻の教員とある程度の交流を行っているのに対し、他専攻の教員や教養選択科目の教員との交流はそれぞれ20.8%、14.6%である。大学での勉強において、大

学生は依然として自らの専門領域を重要視している。

授業以外の時間には、大学生は学習活動が続けているが、娯楽、運動及び各種の社会活動にも携わっている。学生の学習時間と娯楽時間はそれぞれ、2.7時間と2.6時間で、社会活動と運動時間はそれぞれ、0.8時間と0.6時間である。明らかに、娯楽時間に比べ、学生が学習にかけた時間はそれほど多くない。社会活動と運動時間を含めて考えると、学生の学習時間が相当限られている。また、学習時間の中で、専門領域の知識に関する勉強時間は全体の52.4%を占め、学生の専門知識への執着を示している。

学習内容に関して、学生が最も重要視するのは「語彙」(57.1%)で、以下は「文法」(53.8%)、「聴解」(51.1%)、「読解」(28.8%)、「作文」(3.6%)の順である。実際には、「語彙」、「文法」、「聴解」はいずれも語学力の基礎をなしているものであるのに対し、「読解」と「作文」はそれより次元の高い能力で、優れた思考力、分析能力、知識の蓄積などを必要とする。こうした順番を見ると、学生たちが比較的身につけやすい日本語基礎能力を重んじる一方で、職場でより高く評価される総合的な能力の育成にはあまり力を入れていない。

一方、「大学教育における種類別知識の重要度」という項目において、学生が最も重要度の高いと考えているのは「専門基礎知識」で、その次は「幅広い知識」、「職業関連知識」、「高度な専門知識と理論」の順である。しかし、学生の実感として、大学が重要視するのは「専門基礎知識」、「高度な専門知識と理論」で、彼らの期待との間に一定のズレが存在している。

9.2 大学ランク別に見る学生の学習活動

同じ学習活動とはいえ、大学間の違いも無視できない。中国の四年制大学は重点大学と一般大学に分けられ、学生の入学時の成績にはある程度の差が見られる。高等教育の大衆化の影響で、いずれの大学にもいわゆる伝統的なエリート学生と性格の異なる大衆型学生が大量に現れているが、重点大学より一般大学のほうがより多くの大衆型学生を受け入れていることは考えられる。こうした違いは学生の学習活動にどれぐらい反映されているか、ここでは具体的に探してみたい。

学生の学習時間に関して、重点大学と一般大学との間で、比較的差がついているのは、娯楽と社会活動の時間である。重点大学学生の毎日の娯楽活動は2.43時間で、一般大学学生の2.74時間より少ないのに対し、前者の社会活動は1.04時間で、後者の0.59時間を大幅に上回っている。また、「毎週授業以外の内容別学習時間」を見ると、専攻分野、趣味、英語に掛けている時間は一般大学学生に比べ、重点大学学生がそれぞれ18.5%、31.2%、68.9%長く、各種の知識や技能をより多く吸収しようとしている。

学生の重視する学習内容に関して、いずれの大学において学生たちが「聴解」、「語彙」、「文法」をもっとも重要な三つとするが、一般大学学生が「文法」を最重要視しているのに対して、重点大学の学生は「文法」を三番目にしている。また、35.9%の重点大学学生は「読解」を重視しているが、一般大学学生はわずか21.3%しかいない。

さらに、知識の重要度に関して、重点大学学生が最も高く評価しているのは「幅広い知識」(71.7%)で、以下は「専門基礎知識」(70.2%)、「職業関連知識」(65.0%)、「高度な専門知識と理論」(59.3%)の順である。それに対して、一般大学学生は「専門基礎知識」(58.4%)、「職業関連知識」(53.9%)、「高度な専門知識と理論」(52.9%)、「幅広い知識」(48.0%)の順となっている。明らかに、重点大学学生は知識の重要度をより高く評価するのみならず、「幅広い知識」を最も重要な知識としている。一方、「大学の各種知識への重視の度合い」と照らし合わせると、「専門基礎知識」と「高度な専門知識と理論」への大学の重視度と学生の重視度におい

て、重点大学の場合両者の差が小さくて、そちらの学生が専門知識の教育にはかなり満足している。

9.3 学年別に見る学生の学習活動

学生の学習生活の実態を描くために、トータルで眺めるだけでなく、学年別で学習活動の変容を調べることも大切である。大学での学習経験の積み重ね、学習内容の変化が学生の学習意識と行動に影響を及ぼすのは避けられないことで、さらに進路選択も高学年学生の学習活動を左右していると考えられる。

学生の授業外学習時間は二年生が最も多くて、毎日2.95時間に達し、以下は三年生(2.89時間)、一年生(2.54時間)、四年生(2.43時間)の順である。一方、毎日の娯楽時間と社会活動時間はいずれも二年生が最も少なく、四年生が最も多い。また、週単位の授業外学習時間も二年生が最も多くの17.23時間を示している。特に、二年生が自らの専門分野の勉強に10.53時間を費やし、非常に目立っている。それに対して、英語と趣味についての勉強時間は学年ごとに増えているため、就職や将来の進路に有利な知識が高学年学生にとって非常に重要だと考えられている。

学生の重視する学習内容に関して、低学年学生と高学年学生との間の差ははっきりと見られる。一年生と二年生の中で、「語彙」、「文法」を重視する学生が多いのに対し、三年生と四年生は比較的「読解」と「聴解」を重視する。また、知識の重要度においても、学年の差が存在している。高学年学生に比べ、低学年学生は四種類の知識の重要度をいずれも高く評価している。ただし、「大学の各種知識への重視の度合い」では、二年生と三年生より、一年生と四年生の中で大学の重視の度合いが高いと受け止めている学生の数が多い。

大学に在学する四年の間、二年目は学生が最も学習に力を入れている時期であるが、外国語の勉強においては土台作りの段階で、大学教育への理解はまだ不足しているため、いかにして学生の学習意欲を高学年まで維持していくかは重要な課題の一つである。

10 これからの課題と展望

教育学的常識にしたがえば、教師の本来的な仕事は、学生たちに勉強を強制することではなく、自主的に学ぶ意欲をつけさせることである。これに異論を唱える教師は、まずいない。しかし、実際の状況はどうか。現実には大量の宿題を課し、管理的な授業に終始している教師も、けっして少なくない。むろん、そうした教師を非難しているわけではない。いまのように、大学教育が大衆化したなかでは、そうせざるを得ない事情もよくわかる。

しかし、アンビバレントな言い方になるが、大衆化したからこそ従来型の教育ではなく、新しい授業実践が必要とされる時期にきている。大衆化すればするほど、学習意欲のない学生たちの数は増える。そうした学生たちに「管理的な」教育をすれば、かえって逆効果ということもある。まして、いくら中国に固有で伝統的な教育方法だからといって、暗記と文法に傾斜した授業だけでは、とても彼らはついてこれない。もはや、「エリート教育」の時代ではない。いま、強く求められている課題は、大衆化した学生たちの存在を前提にして、あくまで彼らに迎合することなく、新しい授業の「形」を作っていくことである。

経済産業省アジア人財資金構想 「東北大学 ASIST」におけるe-learning 教材の開発

東北大学/東北多文化アカデミー 虫明美喜

東北多文化アカデミー 金文浩

東北大学情報科学研究科/東北多文化アカデミー 押谷祐子

宮城教育大学/東北多文化アカデミー 鈴木衣今子

本稿では、2007年から5年間に渡って行なわれた、経済産業省・文部科学省によるアジア人財資金構想「東北大学 ASIST(Cooperative Support Program for Asian IT Student Career Route in Japan)」ビジネス日本語 e-learning 開発の実践報告および今後の展望の考察を行う。

1 アジア人財資金構想について

1.1 アジア人財資金構想

アジア人財資金構想(高度専門留学生育成事業)とは、2007～2012年度に経済産業省と文部科学省によって実施された人材育成プログラムである。日本企業に就職を希望する外国人学生を国費留学生として迎え、専門教育、ビジネス日本語教育、日本ビジネス教育、インターンシップを行ない、就職活動支援を経てグローバル人材として日本企業・日系企業に送り出すプログラムで、今年ベトナムを加えて3カ国となったEPA(経済連携協定)看護師・介護士受け入れと共に、多くの日本語教育関係者の関心を集めている。

2008年に、日本政府によって発表された「2020年留学生受け入れ30万人計画」は震災のため足踏みを余儀なくされたが、企業のグローバル化、少子高齢化を背景に、世界各国との相互理解・経済連携の強化は必至の課題で、高度外国人材の育成はますますその重要度を増しており、2012年9月に5年間のプログラムが修了するアジア人財も、それぞれの実施主体(コンソーシアム)が自立化してプログラムを継続させることが求められている。(「アジア人材資金構想」2009, P2-4)

1.2 日本語教育としてのプログラムの特色

日本語教育の視点から注目されるアジア人財資金構想プログラムの特色の一つに、AOTS 海外技術者研修協会(現 HIDA)を主体として開発された共通カリキュラム PBL(Project Based Learning)教材がある。この教材の目的は、「社会人としての行動力」や「日本のビジネス文化への理解」等、従来の日本語教育の枠を超えた幅広い能力を、「体験活動」を通じて育成することであり、評価にはCan-Do Statement(日本語力チェックリスト)、行動変容シート、ポートフォリオ(学習記録)、カンファレンス(面談)など、これまでにはなかった新しい評価方法が採用されている。まさに「日本語を学ぶ」から「日本語で成し遂げる」への転換であるといえよう。

2 東北大学 ASISTについて

2.1 東北大学 ASIST

東北大学 ASISTは全国23の実施主体の1つであり、情報科学研究科を中心としたIT人材育成プログラムであり、目標をIT企業への優秀な人材の定着・活躍に置いてきた。プログラムの特色としては、民間企業との連携、インターンシップを通じた実践IT教育訓練、ビジネスセミナーなどを含む日本語ビジネス教育が挙げられる。表1はこれまでの国内企業への就職実績である。国費留学生のためのプログラムではあるが、広く私費留学生にも開放されており、就職内定先は国費・私費共に1部上場のIT系企業をはじめ、研究所を中心とした電気、通信、自動車、車載メーカー等々「高度人材」の名にふさわしい企業である。なお参加者の中には博士課程や大学の研究職に進路を決めた者もいる。

表1 2007～2011年 ASIST 受講生集計

	国費	私費	TA(留学生のみ**)	計
IT 授業/日本語授業*共に参加	36	21		57
IT 授業のみ	1	9	8	18
日本語授業のみ	1	27	10	38
受講者計	38	57	18	113
(就職内定者数)	(23)	(20)	(5)	(48)

* ビジネス日本語の授業は、前期・後期それぞれ15週、1週間に90分×2コマ実施された。

** 授業には日本人 TAとともに、ビジネス日本語を修了した留学生 TAも参加した。

2.2 e-learning 教材の開発について

東北大学 ASISTビジネス日本語プログラム開発は、発表者のうち2人が所属していた産学官の協力企業によって行なわれ、現在は一般財団法人東北多文化アカデミーに引き継がれている。概ね春学期(テレビや新聞の時事問題理解とディスカッション、敬語を中心とする待遇表現の学習)、秋学期(エントリーシート作成や面接指導などの就職活動実践)とそれぞれ特色ある授業を展開し、日本での就職を希望する留学生をサポートしてきたが、プログラム開発の中でも大きな位置を占めていたのは、1年を通じて自主学習可能なe-learning 教材「ささかま」の開発である。コンテンツの入れ替えが比較的簡単にできるという特色を持つプラットフォームの下に「クラス」と呼ばれる3つのコンテンツが開発された。現在東北多文化アカデミーと東北大学日本語研修室が協力し、4つめのコンテンツを開発中である。「ささかま」は、東北大学 ASISTの授業でも、教師とのインターアクションと並行しての学習ツールとして多用され、その教育効果は顕著であった。

表2は、開発された3つのコンテンツのうち、最初に作成されたIT企業就職ストーリーの目次である。アシスト研修を受けた留学生の張志芳君が就職活動・面接を経て日本のITシステム開発会社に就職し、プロジェクトメンバーとして業務を経験しながら人間関係を築き、成長していく。それぞれの課には概要説明(はじめに)と動画スクリプトが文字で表示されており、動画の視聴、理解チェック(e-mailで講師に提出)、繰り返し、ロールプレイの4つの活動ができるようになっている。IT会社が舞台になっているが、発話機能にも配慮しており、一般向けの教材としても十分に使用することができる。

表2 e-learning 「ささかま」目次

01課 アシスト研修	(1)就職活動
02課 就職活動	(1)エントリーシート (2)面接
03課 仕事上の様々なやり取り	(1)質問する (2)相談する (3)協力してもらう (4)申し出る (5)注文する (6)ことばについて質問する (7)謝る
04課 退社後のやり取り	(1)退社後のやり取り
05課 社内の人間関係	(1)誘われる (2)苦情を言う (3)誘われて断る (4)気遣う (5)先に帰宅する
06課 システム開発①②	(1)受注 (2)要件定義と概要設計
07課 システム開発③営業部との打合せ	(1)電話をかける (2)電話を受ける
08課 システム開発④概要設計の書き換え	(1)本人に代わって対応する (2)携帯電話 (3)仕様の変更
09課 システム開発⑤取引先での打合せ	(1)取引先の受付 (2)禁煙 (3)打ち合わせ (4)詳細設計
10課 システム開発⑥	(1)指示 (2)プロジェクトミーティング (3)プログラミング (4)テスト項目 (5)納品日の変更 (6)間違い電話
11課 システム開発⑦	(1)納品日変更への対応 (2)納品日の交渉 (3)単体テスト (4)なぐさめる (5)テストデータ (6)聞き伝え
12課 システム開発⑧	(1)結合テスト結果報告 (2)意見を述べる (3)伝言
13課 システム開発⑨	(1)納品 (2)お礼メール
14課 上司宅を訪問する	(1)上司宅を訪問する (2)訪問のお礼
15課 いろいろな挨拶	(1)上司に話しかける (2)友人に話しかける (3)知人に話しかける (4)ばったり会う (5)天候の挨拶 (6)さまざまな挨拶

2.3 授業使用例および受講学生による感想

授業はe-learningの個別学習(非同期型)を踏まえた集合学習(同期型)のBlended Learning (ブレンド学習)形式で行なった。ASISTの授業は日本人 TAを交えた協働学習形式を多く取り入れおり、e-learningの素材を刺激として、その時々参加者に必要な要素(プレゼンテーションの練習や補助教材の読解など)を付け加えて発展させていった。学習者の日本語能力レベル差は、全国の本プログラム実施主体が共通して直面する課題であるが、この協働学習によって、レベルの異なる学習者の授業を円滑に、また効果的に進めることができた。受講した留学生・留学生 OB・OGからは、「ビジネス日本語を勉強する目標が、(プログラム受講を通して)さらに明確にでき、授業で確実に成長できる」(「ASISTレポート」Vol.1)「就職活動をしている他の留学生との交流が深められる」「面接試験で『外国人なのに丁寧な日本語を自然に使えてるね』と言われたのが印象的」(同 Vol.6)「ビジネス日本語はもちろん、日本の会社と

いう“組織”について学び、実際今その知識が役立っている」(同 Vol.7)などの感想が寄せられている。

2.4 国内外での今後の発展可能性

震災後の留学生の減少は徐々に回復傾向にあるが、今後は長期日本留学を経験せずに海外で日本語に習熟し、日系企業に就職する学生も増えてくると思われる。現に日本企業が北京・上海等に出向き、本社採用のグローバル人材を直接面接・採用するケースも見られるようになってきた。そのような学生のニーズにも対応するため、今後このビジネスe-learning教材をさらに発展させ、東北大学キャリア支援センターと連携した短期訪問研修生として受け入れ、日本の就職活動を「現地体験」することができる冬の2週間プログラムにつなげて行く計画である。

世界第2の経済大国である中国における日本語教育は、「日本語を学ぶ」日本語の研究者育成のみならず「(中国語・英語はもちろんのこと)日本語でも成し遂げる」ビジネス志向にも応えられる、多様なニーズへの対応の必要性が今後ますます増大していくと思われる。今後の両国の発展とアジアにはばたくグローバル人材育成のため、日本と中国双方の教育機関との継続した協力体制構築が望まれる。

また今後の展開として、今回開発したプラットフォームに「初級教材」や「日本留学事前学習的な文化教材」「企業に実際に採用になった外国人へのインタビュー」など新たなe-learning教材を加えて行く予定である。2012年冬と夏の二回、執筆者らは宮城県の助成を受けて東北大学国際文化研究科との連携による2週間の“エデュケーション・ツーリズム”を実践し、ロシアと中国の学生を受け入れた。来日した学生は、それぞれのレベルに合わせて日本語学習も行いつつ、自国ではなかなか味わうことのできないナマの日本を、さまざまな形で味わって帰国していった。震災後に減少した外国から日本への訪問者を取り戻すため、今後とも引き続きこの事業をアピールし、継続して行きたい。

参考文献

- [1]「アジア人材資金構想 留学生生活用事例集」経済産業省・アジア人材資金構想プロジェクトサポートセンター 2009
- [2]「東北大学 ASISTレポート」Vol.1, Vol.6, Vol.7 東北大学大学院情報科学研究科内 ASIST 事務局 2010・2012